

より良き人生を創る人たち [ライパーズ] 2

【巻頭エッセイ】漢字 / 山川 静夫 4

「逃げる」川端康成の伴走者 / エドワード・G・サイデンステッカー 8

「戦後日本」へ火を放つ / 西部 邁 12

子供を論じ続ける児童学の先駆者 / 本田 和子 16

演劇の国を震撼させた演出家 / 蛭川 幸雄 20

リタイア後は、女房と遊ぶ / 向井 万起男 24

老齡期の「生きがい」を求めて / アルフォンス・デーケン 28

常識に軸足を置く保守の論客 / 上坂 冬子 32

「観光」を学問する / 石井 昭夫 36

「音楽」を撮る写真家 / 木之下 晃 40

無垢の木に導かれて / 北田 たくみ 44

連載【エッセイ】酒のみの技術 XIX / 矢野 誠一 48

【静舎逍遙 - 東京の寺院 -】「曹洞宗 諏訪山 吉祥寺」 50

いつも「こころざし」を持ち続けて / 山本 博文 52

【俳句会の風景】「新現役ネット俳句会」 / 松井 国央 54

編集後記 60

アフリカに誕生した現世人類ホモサピエンスは、二本の足で直立しながら、地球の隅々に広がってゆき、その一部は蒙古斑点をつけながら、当時はまだ陸続きのベーリング海峡を渡り、南米の先端にまで至っている。しかし、それは億を単位にした時間と幾世代もの継続の結果であった。

十五世紀に始まった大航海時代に、スペインやポルトガルなど西洋先進諸国という人類のエリートが地球を「一球」として把握し、乗り物を使って地球規模での移動を開始した。しかし、実際に地球規模で移動したのは奴隷と少数の支配者だった。

今、二十一世紀、我々人類は、市民、個人の大家レベルで、大量に、短時間に、安直に、そして自由な意志で、地球規模の移動を日常的に繰り返して行っている。その集積数は膨大だ。「地球規模での人の移動」という視点から見るときに、何か途方もないことが地球上の人類に起こっているようだ。

モンスタースター

「これまで万の単位で人間が国境を越えたのは、近代の歴史の中でも戦争や難

「観光」を学問する

石井 昭夫

Akio Ishii

民だけです。それが今や世界で国際観光に年間七億人が出かけています。人類の総人口の一割強にあたる人が観光で毎年国境を越えるのです。

石井昭夫さんは「観光学」という耳新しいジャンルを切り開いてきた人の一人だ。そもそも「観光学」なるものが何であるかを問う前にまず引き続きお話を聞いてみることにする。

「八十年代の終わりにノーベル賞を受賞したアメリカの経済学者が『観光こそ世界最大の産業だ』と喝破しました。大雑把に言って世界のGDPの一〇%、世

界の雇用の一〇%を占める経済活動が観光によって発生していると考えられます」

世界人口の一〇%が毎年国境を越え、その上に国内観光で動く人がいる。ホテル、旅行会社、レストランなどのいわゆる直接的なレジャー産業だけでなく、それらを支えるさまざまなサービス業も考慮に入れば、十分に計算が合いそうだ。

一旅行者として海外旅行などを楽しむ我々個人の動きとその影響を、人間活動の集積として全体的に把握するとき、そこにはまさしく人間の歴史の上で刮目す

377(写真)削奈

べき新たな社会的、経済的、そして人類学的な現象が急速に大規模に始まっているというのだ。

常時大衆大移動というモンスターの現象の出現である。

観光学

飛行機、鉄道、自動車などの大量長距離移動手段の発達と低コスト化。食べるための活動から開放された自由な時間の拡大。豊かさや平和。観光の一〇%現象の背景はさまざま。更に、人がこれだけ大量に動きまわることによって、ごみや環境破壊などの負の現象も無視出来なくなってきた。「エコ・ツーリズム」などの言葉も生まれている。これらの現象のさまざまな側面を研究解明しようと専門家が現れるに不思議はない。

「これまでの学問は定住を前提にしていきましたから、統計一つをとっても容易ではありません。また、観光学は、社会科学の一部門であるだけでなく、観光産業という実体的な産業の分野を対象としているから、観光商品の生産と流通という実学的な知識が不可欠で、それも交通産業、宿泊産業、外食産業、旅行業などなど、非常に間口が広い。それに切り口

人。これを倍増しようと官民あげての活動が行われていると聞く。

「やっていることはトンチンカンなんです。

上滑りというか、建前で形を作るが、実は本気ではないとか。日本は観光まで外貨を必要としない珍しい国です。国のレベルでも本気になる切羽詰まった事情がない。又、業界も外国人客は、よほど困らなければあまり歓迎しない。言葉も食事も支払いも心配ない日本人客が一番いい。アジアからのお客は安くて食指が動きにくい。他の国では外国人客が一番の上客ですよ。日本はそれと対象的です」

石井さんは温厚な方だが、発言は時に辛らつである。

「でも、どうなんでしょう。日本への関心とか日本に来た人達の評判とかは」

「日本は魅力ある不思議な国として外国人の関心はとても高い。実際来てみると、安全、親切、清潔でとても居心地がいい。欧米人は東洋文化、アジア人はかつて日本がアメリカに抱いていた憧れのようなものを感じている。彼らにとって日本はさらさらしているのですよ」

多少の揺らぎがあるにしても、安全、

も経済学や社会学を先頭に人類学、心理学、政治学と百花繚乱だ。未だに体系なく、体系を作り得るかどうかも分からない。新しい、不確かな、しかし、まさに現代の課題満載の分野です」

長い伝統のある学問分野が垂直的、体系的であるとすれば、新しい観光学は少なくとも今のところオムニバスのな、或いは専門店が雑居するショッピングモールのような並列水平的展開のようだ。猛烈な勢いで成長する現代のモンスターを素早く捕らえるには、とりあえず持ち合わせる道具を総動員してかかる必要があるのだろうか。

長期家族休暇

話題を少しずらし身近な日本の観光事情についてお聞きする。

「日本は旅行後進国ですよ。しかも、周回遅れです」意外な発言だった。

「日本人の観光はまだまだ若年、OL、高齢者中心で、いわば枝葉需要です。子供がいる家族の長期連続休暇、これが観光の中心にならなければいけないのに、この国にはその体制が全く整っていない」

太陽を求めて南下するバカンスが生活

清潔、親切という点では日本は他国に負けない。その上に、四季を通じた多様な自然美、奥深い伝統文化や芸術、近代都市と工業技術、オフアール出来る観光資源は豊富である。

「最近の町も面白いですね。例えば北沢や原宿など。アジア的なごちゃごちゃした町並みをヨーロッパ風に瀟洒に仕上げて、人気があります」

「それに冬の日本は絶対に『売り物』です。北海道のニセコ・リゾートには年間七千人ものオーストラリア人スキーヤーがやってきて平均一〇日間滞在します。

週単位の安価なリゾート滞在型商品の先鞭をつけるものです。この発想は従来の日本人にはなく、これはオーストラリア人によって開発推進されてきたものです。世界有数の冬季リゾートになる可能性があります」

「外国で実際に日本向けのツアーを作り、売り込んでゆく、その先端の実務を支援する。その為の予算配分をきちんとする。外国の人達の発想と意見を継続的に拘い上げ取り込んでゆく知恵と努力。すぐにやれることは沢山あります」

石井さんの辛口のお話はまだまだ続く

必需品になってきている欧州の実情を長年現地つぶさに見てきた石井さんの目から見ると日本の現状はあまりにもひどい。

「フランスでは一九三六年の有給休暇法が成立、就職二年目からの連続二週間の有給休暇が義務付けられ、同じ年にILO五十二号条約として普及しました。資本家の過酷な搾取から労働者を守る必要があったし、独伊では戦争に勝つ為の強い肉体制りの意思もあつたようです。動機は動機として、いずれにせよ、時間をかけてそれが可能になるインフラ整備がなされてきた。一方、日本は有給休暇に関するILO条約を無視し続けてきたのです。日本と欧州では『休暇』というものに対する意味づけが決定的に違っていましたね」

なるほど。そういう歴史の積み重ねが背景にはあるのだ。日本人にとって欧州の形が唯一最良かどうかは別にしても、日本では子供連れで一、二週間連続的に休みを取って楽しむことが普通の家庭では難しいことは紛れも無い事実だ。確かにこれは大きな問題だ。

観光立国

現在日本への海外観光客は約六百万

が、じつくりお聞きすると「観光の日本」への期待も膨らんでくる。

食べ物を求めて大陸を彷徨したホモサピエンス。支配と搾取のために丸い地球を丸く渡った人類のエリートとその犠牲者。そして今、人口爆発とグローバルな世界の進展を背景に、自由意志で自分の楽しみのために動く普通の人々の大きな群れ。この現象をさまざまな角度から凝視して、我々人類はその意味を自問し始めているようだ。

一方、戦後六〇年、日本人は自らの山河と暮らしぶりを改めて見つめなおし、その自己認識に形を与え、商品として外国の人々に提示しようとしている。

「観光」という活動の広さと深さを垣間見る思いのお話だった。

一九三七年生まれ、鳥取県出身。東京大学文学部フランス文学科卒業。特殊法人国際観光振興会入社。同会パリ事務所勤務を経て、海外宣伝部長、理事を歴任。平成十年立教大学観光学教授。現在、帝京大学経済学部観光経営学教授。日本観光研究会会員。訳書「トマス・クック物語」で交通図書賞受賞。著書に「新時代の観光戦略」(共著)など。

文/高野公一 写真/編集部